

「お太鼓結び」の起源に關する疑ひ

遠 藤 武

一 序 説

「羽織がなければ外出できない」と云はれる程羽織が現代婦女子の美容上特に重要な地位を占めて居るのに反し、特殊階級を除いては一般に着用しないのを普通とした江戸時代に於て、帶就中帶の結び方が婦女子の美容上重要な地位に置かれて居た事はいふ迄もない。殊に徳川初期の繪畫や文獻にみえる様な帶巾の狭い時代に於ては帶の結び方が差程重要なものでもなかつたが、寛文以後帶巾も漸く廣くなるに至つてからは帶の結び方も必然的に重要なものとなつた。されば、その結び方にも種々な名稱や形を文獻や繪畫に残して居るのである。

こゝに考究せんとする「お太鼓結び」も、その源を江戸時代に發した帶結びの一つであるが、現今この結び方

が一般婦女子の正式の結び方として、日常生活に密接な關係を有して居る事は吾人の良く觀る所である。然し乍ら從來この「お太鼓結び」に關する起源説はその當時の文獻的な繪畫的な證明もない非常に漠然としたものであつたのである。否、現今に於ても不變の有様であるのである。然るに愚生には、それよりの文獻や繪畫にこの名、この形がみられるからしてこの一篇を記した次第である。

二 辭書類其他に現れたる「お太鼓結び」の起源とその根據に對する疑問

お太鼓結びの起源に關して、今日迄刊行された辭書類其他の書籍に記載されて居る事項をみると、何れもが文

化十四年の龜井戸天神太鼓橋再建によるものとして居る。これ等辭書類其他の書籍に記されて居る文化十四年説の根據となるに至つた文献は、それは「花衣」(明治三十二年刊)記載の故人大槻如電氏の説であるのである。それによると、

サテ。このオタイコと名に付きましたのに。一條の御物語りがございます。七年前でした私が四方梅彦と。近世女風俗考と申す書物の事に付きまして。種々な雜誌の中に。梅彦老人申しますのに。女が結ぶオタイコといふ帶は。龜戸天神の大鼓橋が出来た時に。江戸の人が珍らしがつて。渡りに出かける者が。其當座毎日何百何千といふ人數で。一時は市中一般の話艸と成つた事があつた。其頃からこの帶の結び様が始まつて。大鼓に結ふといつた事がオタイコと唱へることに成つたのだ。是れに師匠種彦から聞き傳へた話したと申されました。成程守袋を帶の間へ通しまして。少し上へ高くショイ揚げますから帶の間が隙きます。今なら帶の間に穴が出来から。トンネル結とでも名付けるでせうが。横から見まして太鼓橋の様になる所から太鼓に

(167)

いた事を。能く記憶して置くと。マサカの時には。かういふ様な功を奏します。

といふのである。

もしも大槻氏の説の如くこの結び方が盛となつて一般婦女子に結ばれたとしたものならば、其昔、吉彌結びが盛となつて元祿文學を賑はしたと同様に爛熟きつた文化文政の町民文學の中に少くとも一つ二つありそうなのであるが、愚生淺學の爲見出されないのみならず、梅彦老人の師柳亭種彦の著作の中にも、それらしい話もなければ、その名すら見あたらないのである。そればかりか反つて、この「お太鼓結び」と最も關係の深い「ひきあげ結び」及「やの字結び」即「路考結び」が、それより以前の文献や繪畫に現れ(後述)、殊に「やの字結び」が當時の文献に多く出て居るのも皮肉な事である。

斯様な次第であるからして、直に大槻如電氏の所謂文化十四年太鼓橋再建にその起源を置く説をその儘鵜呑みにする事は出来ないのである。尙當時の文献に、この名が無いからとて、この結び方が當時全然なかつたと否定する事も出来ないのである。何故なば寶曆年間瀬川菊之

「お太鼓結び」の起源に關する疑ひ(遠藤武)

結ふと申した事と存じます。

ソコデ今度此衣物のうつりかはりを。シャベリまするに付きまして。此事を思ひ出しましたから。龜井戸の太鼓橋は。いつ何時出来たらうと武江年表や何か搜した所が分らない。何でも文化文政の界たと。友達にも聞合せたが。誰も明らかな返答がない。ソコデ天神様へ出かけ。社掌の比良木といふ御方に御目にかゝり一部始終お物語りをしました。社の記録にも何にも覺えがない。ハテ御氣の毒と首を傾けられて居られたが。やゝありました擬寶珠に年號が彫付てあつた様だと。云はれましたから直に駆けて橋の袂へまゐり。欄干の擬寶珠を検査しました所がありましたとも。ありましたとも。チャンとありました。

寛文二年二月二十五日造

文化十四年十一月吉日再造

この再造の時に。江戸中が珍しがつて見物した。其時に此オタイコの帶の結びが世の中に流行たので文化文政の界と思つたが。丁度真中で文化は十四年きりで。十五年は文政元年とかはるのです。何でも老人達に聞

承が創めたといはれる「やの字結び」が明和年間には既に行はれて居たのみならず當時盛に婦女子に結ばれて居たからである。されば、このお太鼓結びも、その頃あつたであらうと假に考へてみたならば如何であらうか。事實は、それよりも以前の文献に「太鼓結び」の名がみえ、且繪畫上からも、現今と同じ形が文化以前——寶曆以後のものにみられるのである。

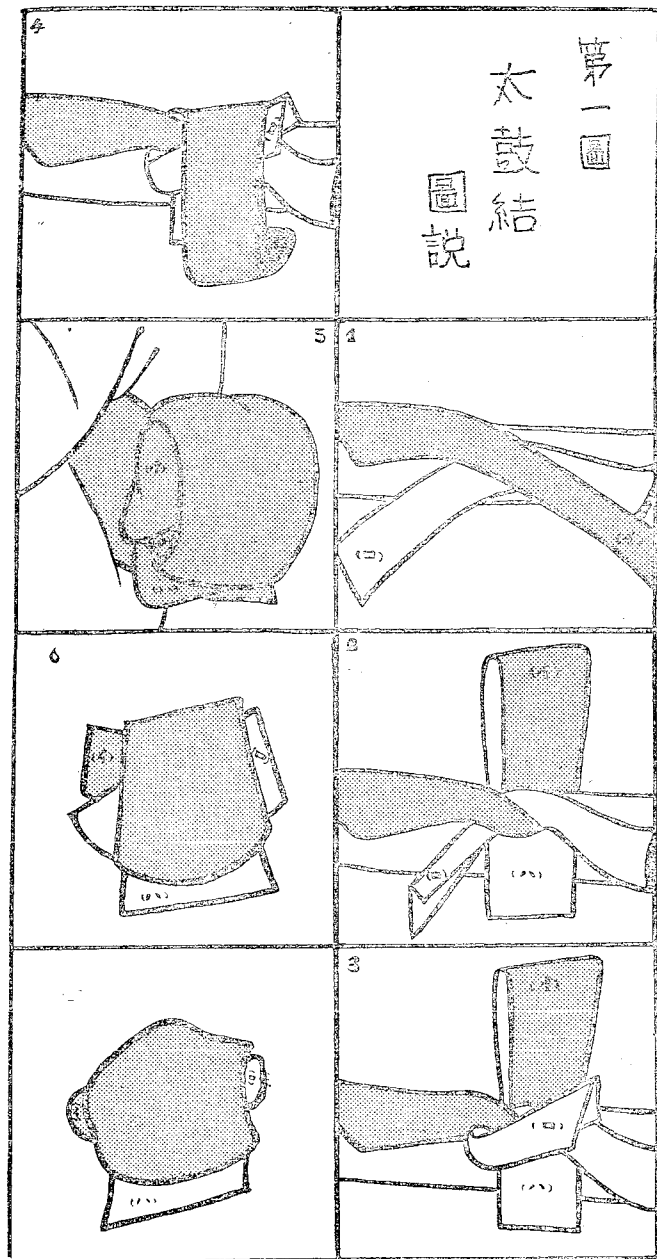
三 正徳・元文の文献とその形態

従來帶結びの名稱に關して文献的・繪畫的に研究したものとしては、生川春明の近世女風俗考をはじめ其他隨筆等可なり多くあるが、それ等は何れもが、生川春明の著作程の價值あるものではない。それ程、この近世女風俗考は近世服飾史上特筆さるべきものである。然し乍らこの書にさへ「お太鼓結び」の條がないのである。一方また江戸文學書を覗いてみても女帶の地・巾・丈・紋様に關する文献や繪畫は非常に多いが、これに反して帶結びの名稱に關する文献は非常に乏しいのである。然し乍ら、この乏しい文献の中にこの「お太鼓結び」の名稱が、

如電説の文化十四年を測る事約百年も以前の文献にみられるのである。即ちそれは正徳四年刊の浮世草紙「近代長者鑑」の記載と、「予享保の初生れ、天明の今六拾有餘歳」の老人の記した隨筆「反古染」の記載である。

前者の浮世草紙の記載は近年世間いたりぜんさくになりて奥様は古金五兩かさて、指櫛にさし給へば、下女仲居までが茶繩子の帯をむなさきに太鼓結び……。

(198)



(199)

といふのであり、後者の隨筆の記載には

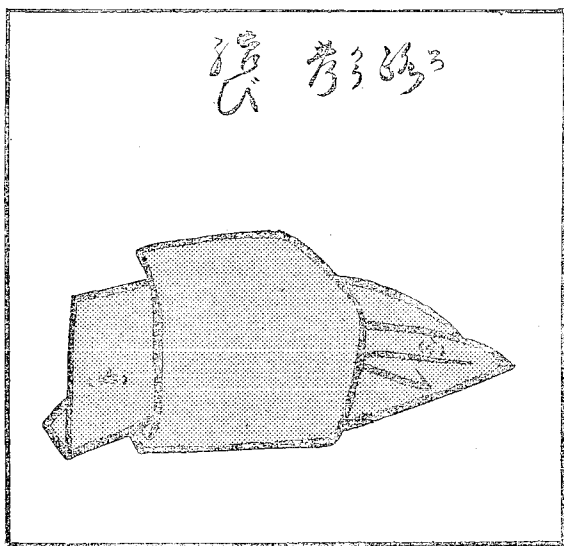
上略 明和の頃より紫裏流行出、安永天明の頃裏模様小紋むく専ら也、同帯は縞縹子、しゅちん、純子、紫縮緬、幅廣く、結目横へ大きく、元文の頃、縮緬の模様、ふくさ、帯太鼓結びにひつし、ぎとて、しんを薄く入、結び目少し筋違、寶曆の頃、眞田帯もふる金入……。

とあるのである。

殊に前者の浮世草紙の記載には「下女仲居まで……」とあるのをみると、當時あるひは、この結び方が一般に普及化されて居たらしく考へられるのであり、繪畫上からもかくみられるのである。兎も角正徳元文年間には、この結び方が行はれて居た事は疑ふ事は出来ない。然らば、その當時の結び方が現今吾々が考へる様な結び方と同じものであるであらうかと、こゝに問題となるが愚生は、これを解く前に、先づ現今及明治の「お太鼓結び」が如何なるものであるかを説明して置こうと思ふ。

現今の「お太鼓結び」は第一圖1カケ(ロ)とタレ(イ)とで2先づ片ワナに結びてタレの(ハ)の部分を作り、3カ

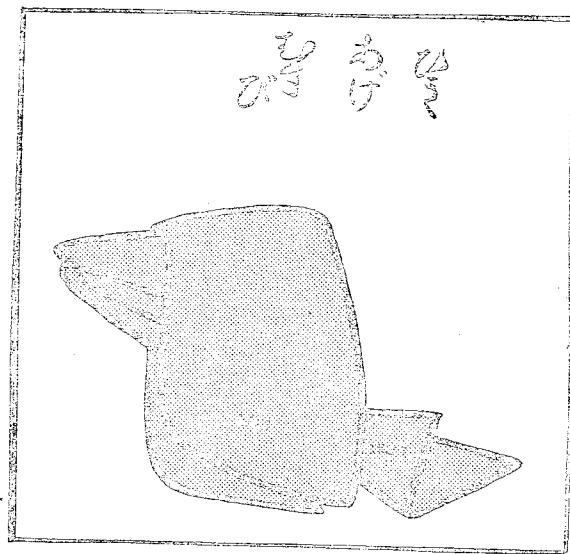
「お太鼓結び」の起源に關する疑ひ 遠藤武



第二圖

ケ(ロ)とタレの片ワナの部分(イ)とで4・5結んだものをいふのである。この最後の結び方であるが、この(ロ)と(イ)を全部結びきつたものを現今「兩角太鼓」といふて居るが(第一圖6)一般には(イ)と(ロ)を中に入れて結ばない人もあり、或は少し出して居る(第一圖7)人もある。明治年間の婦人は多く第一圖7の如きもの

であるとも見もし、聞きもして居る。而して(第一圖)より5までの中(ハ)をみせず結びきつたものが「路考結び」第二圖であり、1より3までして、(イ)を垂したものが「ヒツカケ結び」即「ひきあげむすび」第三圖である。



第三圖

上述の如き明治及現代の見解をもつて、正徳・元文の記載の様な「仲居・下女」の繪畫にあたつてみると實に

全く異つて居るのである。即西川祐信作の百人女郎品定の下女を觀ても、或は仲居を觀ても、乃至は繪本常盤草の下女を觀ても、繪本風俗鏡をみても全く現今のとは異つて居るのである。然らば現今の同じ形態のものは何時頃よりみえて居るであらうか。

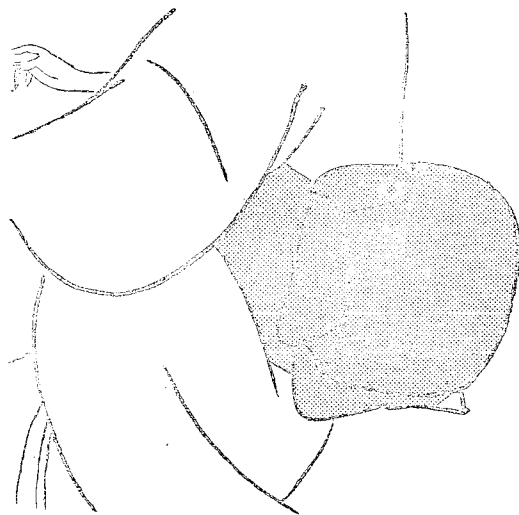
四 帶結びの史的考察より觀たる

「お太鼓結び」の形態

江戸初期の繪畫や文獻にみえる様な帶巾の狭い時代はさておき、帶巾の漸く廣くなり出した寛文の頃に於ては帶結びとしては一般に結び下げ、或は結び目のみえないもの或は片手結び等を除いてはかるた結びがその代表的なるものであつた。それも延寶に歌舞伎役者上村吉彌が出て、その所謂吉彌結びが當時の庶民階級を支配するに及んではかるた結び昔日の面影も失せて獨り燦然として吉彌結びが絢爛たる元祿の世に輝いて居たのである。而してこの風は當時百姓階級に迄も及んで居たと云はれるのである。以後この歌舞伎役者を中心とした水木結び、平十郎結び、路考結び等種々なる形態が出て、一方又、

この間に交つてはさみ結び、御所むすび、おまん結び、かるた結び等があつたのである。然し乍ら此の内現今尙形態の不明なものを除いては以上全部が結び、さげにしたものが乃至は小じんまりと纏つたものが多く、この中にはピンと纏たものも繪畫上よりみられるのである。この風は永く、享保以後までも續き享保以後殊に小じんまりと纏つたものが増加してきたのである。路考結びもこの小じんまりとした形態の一つであるが、これが「江戸若女形瀬川菊之丞路考一年八百屋お七の狂言をせし時とかやそのとき橋がよりへ出る時帶の結び目解けた結びなをさんとするに間もなく取敢ず取てはさみ藝をなす是より始て」起つたといはれるのであるが、それは兎も角としてこの形が明和の寛飴土平傳其他に記されて居るのである。さればこの結び方と同じ「お太鼓結び」が當時の繪畫に出て居たからとて不可思議の事はないのである。されば明和六年に歿したといはれる鈴木春信の浮世繪の中に「二三この形が見られるのである。それは即、版行年代不明の「楊弓美人圖」第四圖と明和三年の「陶朱公見立」

「お太鼓結び」の起源に関する疑ひ(遠藤武)

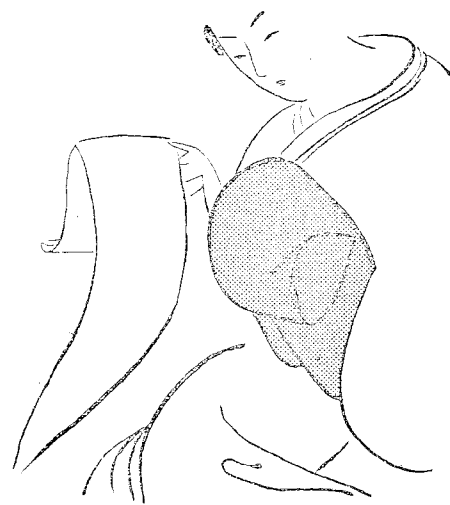


第四圖

の圖の中に「船に乗つて棹さして居る後帶の船頭(女)」と同じく明和二年の「窓の雪」の「前帶の女」第五圖と、同三年の「座敷八景」の内「行燈の夕照」の圖中の「文よむ前帶の女」とである。而して「楊弓美人圖」と「陶朱公見立」の中の「後帶の女」は兩者全く同じ形態のものであり、「窓の雪」のものと「行燈の夕照」の女もこれ亦同じ形態のものなのである。これ等は何れものが現今

の目よりみればその形態が全く同じものである事は述すとも明であらう。⁽⁴⁹⁾

以上は鈴木春信の浮世繪に就いて記したのであるが、尙これより以前の繪にも見られるのである。それは寶曆

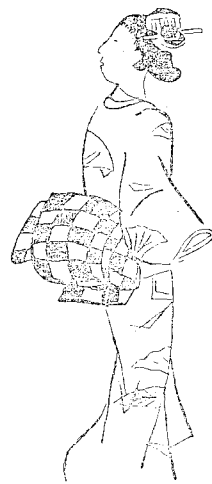


第五圖

(202)

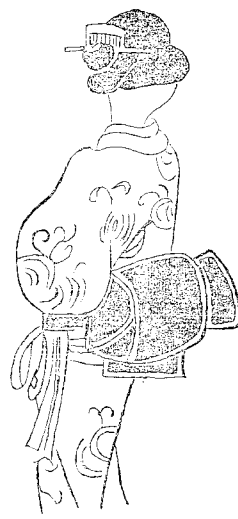
十三年版の「浮世風俗繪本」⁽⁴⁸⁾と題する笑話を記した本の中に二つ程あるのである。この中第六圖の繪は鈴木春信の「楊弓美人圖」と形態が同じものであり、第七圖は現今の「兩角太鼓結び」⁽⁵¹⁾と全く同じものであらう。尙「天明甲辰

初秋平安應學」の落款ある圓山應舉筆の「遊君圖」第八



第六圖

圖の帶結びも亦「兩角太鼓結び」と同じ形態であり、「浮世風俗繪本」のものと同じ形態であるのである。⁽⁵²⁾



第七圖

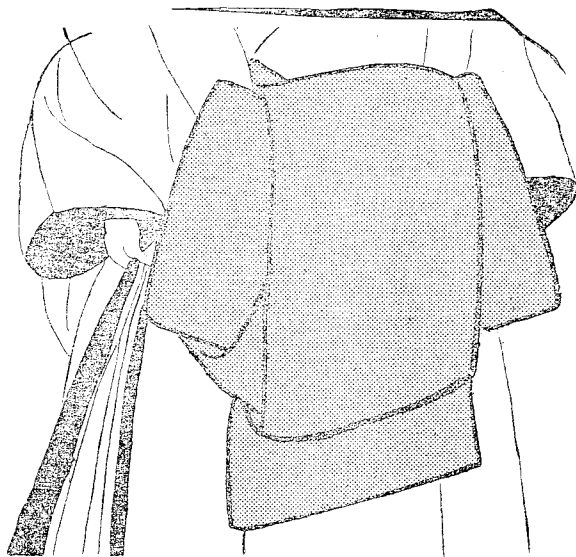
以上何れにしても、「お太鼓結び」の形態は文化以前既に行はれて居た證であると思ふのである。

五 結 言

前述の如く「お太鼓結び」は文獻上からは、早く正徳

(203)

元文年間に現はれ、繪畫上現今と形態の同じものは寶曆以後文化以前に觀られるからして、文獻的、繪畫的な證明もない文化十四年龜井戸太鼓橋再建に起源を置く大槻



第八圖

如電氏の説には賛成出来ないのである。然らば何故に繪畫上に上述の如く有り乍ら文獻上からは正徳・元文以後明治初年まで知られなかつたかといふと、それは他の帶

「お太鼓結び」の起源に関する疑ひ(遠藤武)

結びと同様に帶結び特に名稱に關する文獻が乏しいのと、吉彌結びや路考結びの様に役者より出なかつた事に起因するのであらうと考へるのである。

(昭和拾壹年四月拾日春雨はるゝ日)

註 (1) 日本社會事彙 再版 上巻 帶の條の内「女帶の結び方」三九八頁

圖解現代百科辭典 第一卷 御太鼓結の條 四〇二頁 日本百科大辭典 第二卷 御太鼓結の條 七八頁

近世世相史(齊藤隆三著) 第四期第六章 織巧精緻の衣裳風俗の内 八一〇頁

(2) 「花衣」の内大槻如電自語自筆「衣服うつりかはり」の稿「第六談」一二五—一二六頁

(4) 男色大鑑 第六卷「忍び男女の床違ひ」の條參照 西鶴 俗つれ々 卷四の四「是ぞいもせのすがた山」の條參照

榮大門屋敷 卷第四「親の心子しらず」の條參照

虎栗集 改秋の内 其角嵐雪の連句

大矢敷 卷之三 第二十四 何橋の内

紫の一本 卷下 花の内 淺草觀音の條、及同書卷

下 郭公の内 戸塚毘沙門山の條

久夢日記 延寶の比上村吉彌云々の條

風俗研究 第廿八號 上村吉彌と式亭三馬紀念號

所收の江馬務氏「風俗史上よりみたる吉彌結び」參照

- (5) 都風俗化粧傳 卷之下 第六 容儀之部 帶の條
(6) 右同書 卷之下 第六 容儀之部 帶の條
寒江社日待 上冊「花の宴おもしろい事」の條
春色梅曆^ノ 英對暖語卷之八 第十六回の稿
千紅萬紫 初集「錢屋金埒のもこより」の狂歌の「返
し、あとの三文字をたして」の歌 參照
(8) 賣鉛土平傳、龍虎問答、江戸塵拾、卷之三「路
老結び」の條、鈴木春信(野口米次郎著)、鈴木春信
畫集、錦繪 第二十二號所收 齋藤隆三氏「江戸時
代の流行と人氣役者」(中)の條
(10) 今、五種を挙げ他を割愛す。本朝世事談。都風俗化
粧傳。筠庭雜考。江戸塵拾。嬉遊笑覽。
(11) 同書 卷之第四 「水晶の墮子は見え透ても底
しれぬ身袋」の稿
(12) 續燕石十種 第一所收 同書百七十八頁參照
(13) 大百科事典 第四卷 一九八頁
(14) 右同書 同頁。日本百科大辭典 第二卷 帶の條
(15) 日本百科大辭典 第二卷 帶の條
(16) 愚生の調査した年齢五十歳以上の婦人十人の談。
(17) 都風俗化粧傳 卷之下 第六 容儀之部 帶の條
(18) 日本風俗圖繪 所收の同書下女・仲居の風
(19) 及一般の結び様を參照。殊に、元文の文獻の筋違は
「百人女郎品定」下卷の「はたごや出女」の様なもの
をいふのであらうと思ふ。
- (20) 浮世繪畫集 一―三。浮世繪派畫集 一―五。
(21) あづま物がたり 一「あづまおとこ上らうもんだう
の事」の稿
(22) 古今夷曲集 卷第七 雜歌「博奕によつて行末をた
のむ戀」の歌
(23) 前出(4)を參照
(24) 風俗研究 廿八號 (前出)の江馬氏論文中「芝居百
人一首」の條
(25) 五個の津餘男 卷之一「二、九重のはな見」の稿
(26) 近世女風俗考 下之卷 帶之事 參照
(27) 風俗研究 廿號 江馬務氏「婦人帶結様圖説」
(28) 風俗研究 廿號 江馬務氏「婦人帶結様圖説」
(29) 前出(8)(9) 參照
(30) 好色一代男 卷一「別れは當座はらひ」の稿
(31) 西鶴 俗つれく 卷四「三、御所染の袖色ふか
し」の稿
(32) 世間娘容氣 二之卷「哀れなる淨瑠璃に節のない村
木屋の娘」の稿
(33) 心中大鑑 卷第五 諸國分(三)「肩先に心中黒子」の稿
(34) おまん源五兵衛薩摩歌の「其體格子の染帶を。
結や云々」の條
(35) 風俗研究 廿四號 江馬務氏の「婦人帶結様圖
説」 近世女風俗考 下之卷 帶之事
(36) 浮世繪派畫集 第一冊―第五冊

(204)

(205)

- 浮世繪畫集 第一―三輯。日本風俗圖繪 第一―十
輯。
(41) 江戸塵拾 卷之三「路考結び」の條
錦繪 第二十二號所收 齋藤隆三氏「江戸時代の流
行と人氣役者」(中)の稿參照
(42) 前出(8)(9) 參照
(43) 浮世繪派畫集 第三冊 第百圖、同圖參照
鈴木春信畫集 所收「弓ひき」
(44) 野口米次郎著「鈴木春信」所收 第廿一圖參照
右同書所收 第三圖 及鈴木 信畫集所收「窓の雪」
參照
(45) 浮世繪畫集 一―三。浮世繪派畫集 一―五。
(46) あづま物がたり 一「あづまおとこ上らうもんだう
の事」の稿
(47) 古今夷曲集 卷第七 雜歌「博奕によつて行末をた
のむ戀」の歌
(48) 前出(4)を參照
(49) 風俗研究 廿八號 (前出)の江馬氏論文中「芝居百
人一首」の條
(50) 五個の津餘男 卷之一「二、九重のはな見」の稿
(51) 近世女風俗考 下之卷 帶之事 參照
(52) 風俗研究 廿號 江馬務氏「婦人帶結様圖説」
(53) 風俗研究 廿號 江馬務氏「婦人帶結様圖説」
(54) 前出(8)(9) 參照
(55) 好色一代男 卷一「別れは當座はらひ」の稿
(56) 西鶴 俗つれく 卷四「三、御所染の袖色ふか
し」の稿
(57) 世間娘容氣 二之卷「哀れなる淨瑠璃に節のない村
木屋の娘」の稿
(58) 心中大鑑 卷第五 諸國分(三)「肩先に心中黒子」の稿
(59) おまん源五兵衛薩摩歌の「其體格子の染帶を。
結や云々」の條
(60) 風俗研究 廿四號 江馬務氏の「婦人帶結様圖
説」 近世女風俗考 下之卷 帶之事
(61) 浮世繪派畫集 第一冊―第五冊